

・韓国基礎自治団体の起源・

特別講演3…新羅の城と郡県



ソウル大学校歴史学部副教授
朴省炫 (パク・ソンヒョン)

現在、大韓民国の行政区画は三段階となっており、一段階の市・道と二段階の市・郡・区を、それぞれ広域自治団体、基礎自治団体と呼んでいる。二段階の行政区画である市・郡は、朝鮮の町「邑」を適切な大きさで組み合わせたものであるが、

これらは新羅の郡県から始まった。『三国史記』によると、統一新羅の地方制度は二段階で、全国を九州に分け、州は小京と複数の郡を従え、さらに郡は県を従えていた。新羅末期にはその関係が弱まり、単位の等級を示すようになった。神文王代に九州が整備され、地方制度を確立。新羅では、

邏頭・道使が城や村に派遣され、郡単位の地方官は幢主が務めた。統一期には郡県制が導入され、郡と県の地方官が異なる役割を果たし、新羅末期には郡県間の関係が緩くなり、各郡県が分立するようになった。

三国時代の新羅における郡―省・村制の議論では、行政村がいくつかの自然村から構成され、道使が有力な自然村に派遣されて周辺を統合したとされる説が主流であるが、その具体的な

形成過程は、紐解く必要がある。

『三国史記』の地理志にある三年郡の事例では、新羅は辺境地域や新たに進出する地域に山城を築き、そこに道使を派遣して郡として編制したとされている。これらの山城は新羅国家の支配を象徴する軍事的拠点であり、地域の中心地として発展する基盤となった。一方、内地には高塚古墳群が見られ、在地有力者を通じて間接支配が行われていたことが示唆される。

軍団編制のための人力徴発の単位でもあった点から、単に三韓小国の国邑や邑落がそのまま郡県になったのではなく、新羅国家によって新しい空間組織が作られたことがわかる。これが歴史の中で大小間の変形を経て、現在まで続いたという点において意味を見出すことができる。

高麗、朝鮮時代を経て、山城中心の地域を中心地、すなわち邑治は、変遷の困難を経験することもあったが、多くの郡県では邑治が維持されており、中心地に山城が残っている場合が多い。これらの山城は、現在の基礎自治団体の起源を示す象徴的な建造物として積極的に保存、活用がなされて行かなければならない。

プロフィール

● 啓明大学校史学科助教、副教授、漢陽大学校史学科教授を経て、現職。韓国古代の歴史地理空間史 (Spatial History) の問題に関心を寄せて研究を行う。おもな業績に「地籍原図とGIS地理活用した新羅玉都街路体系の復元」(『韓国上古史学』一〇七、全刊、二〇〇〇)、「新羅統一期漢州の物質移動と流通」(『歴史と現実』二二「ソウル」二〇二二)、「新羅小京の機能と空間構造」(『大丘史学』一五一、大邱、二〇二二) などがあ